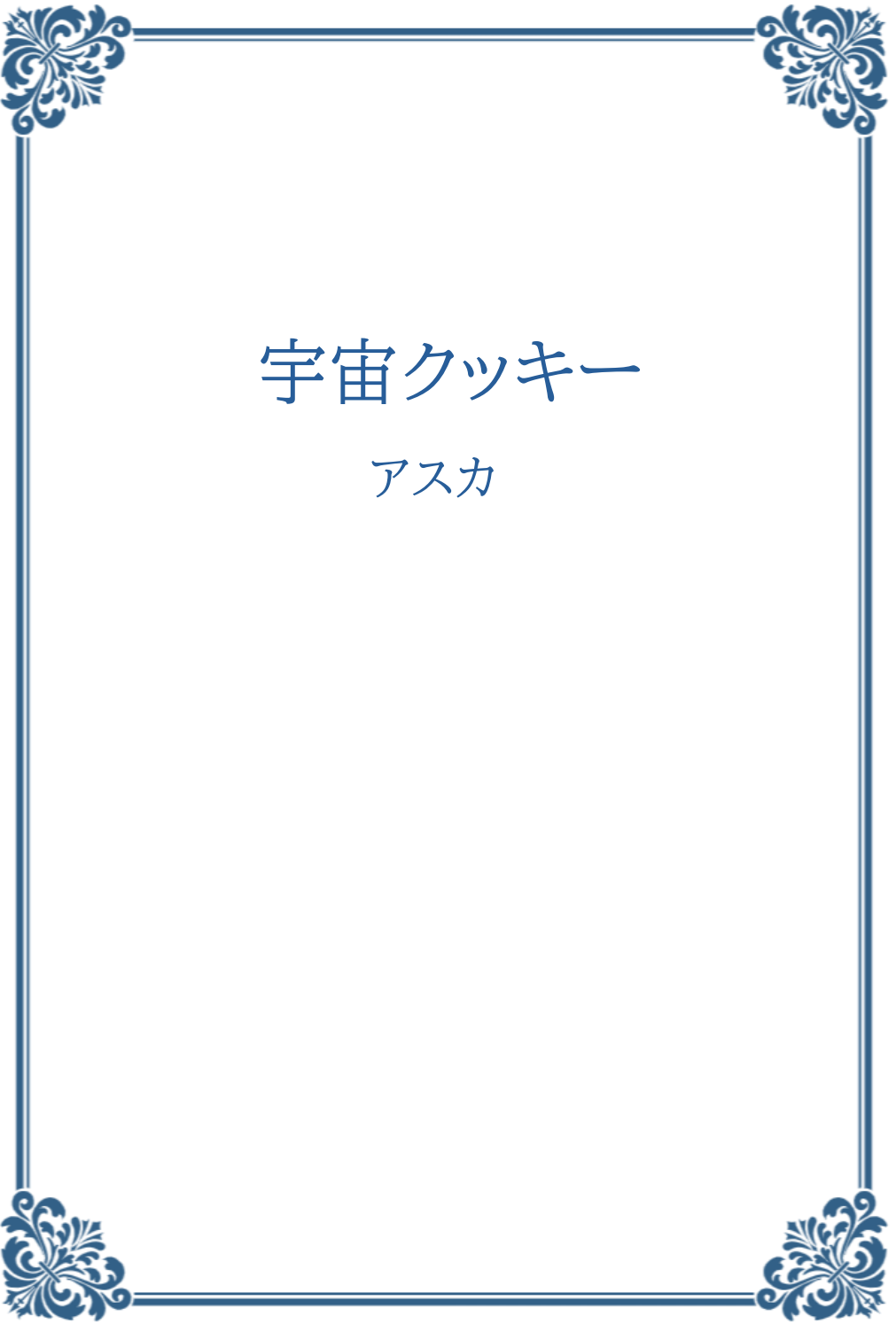




宇宙クッキー

アスカ

第一章 探索

日本の中腹部にある函南町という町。

そこには人間が作った牧場がある。

その牧場は自然豊かな土地にあり、着陸地点にうってつけな山々と研究材料が揃っていた。私は今回この土地をターゲットとし、地球人の『わずかな精神向上を目的としている。これは天の川銀河にとって大切な目標の一つなのだ。』

山中に着陸をし、任務のために地球人の容姿に模していた私は、早々に牧場へ潜入した。入ってすぐに土産屋があり、アイスクリームという食べ物もあった。とても興味深い。私は普段精神体で過ごしているため、食を楽しむという習慣がない。だが、調査のために用意した今の体なら話は別である。

地球人は食から幸福感を得る事で精神を安定させる文化がある。今回私もその感覚を味わってみたいと思ったのだ。

宇宙船には害物質洗浄機が搭載されている。安心して食べてみよう。

私は売り場に行き、嬉々としてソフトクリームを購入した。

そして、この魅力的な白い物体を食してみた。

「あ、甘い！冷たい！こ、これは、とても美味しい……！」

これが食の幸福！私はこの時初めて実感した。

舌に感じる優しい甘味。

食道に流れる冷感。

胃にフワッと広がる感覚。

とても至福である！

人間にとって『食』という文化がどれほど大切か、目の前の愛おしい白い物体を頬張りながら、しみじみと考えをめぐらせた。そして、精神の向上に『食』を使って介入できないかと考えた。アイスクリームに使われている牛乳。これは地球上でかなりポピュラーな食材である。これを使えば多くの地球人に影響を与える事ができるのではないか！

私は、引き続き牧場を探索した。

小さな牛舎の一番奥から白黒の牛がこちらをジッと見つめている。彼女はとても穏やかなエネルギーに満ちていた。私は彼女が精神性の高い個体だと感じ、テレパシーで話しかけてみる事にした。

「はじめまして、牛君。私の声が聞こえるかい？」

牛は少し驚いたようにこちらを見つめた。そしてゆったりとした口調で、

「はい。聞こえます。あなたの言っている事が分かりますし、耳ではなく頭の中から聞こえてくるようです。私の声は聞こえていますか？」

牛は私の真似をするように、心の中で言葉を紡いだ。

「君はとても器用だね！聞こえているよ。」

私は牛の額をそつと撫でた。

「驚かせて申し訳ない。私はこの星の者ではないのだよ。だからこのような話し方もできるし、君と言葉を交わす事もできるのさ。」

牛は妙に納得したような表情を見せた。

「そうでしたか。してあなたはここで何を？人間達と同じように観光ですか？」

「いや、この牧場を探索しているんだよ。私は、とある任務で…。」

地球人の観光客が数人来てしまった。長時間ここにはお邪魔かもしれない。

「折り入って話したいのだが、君が良ければ今夜、私の船に來ないかい？」

急な申し出に牛は少し目を見開いたが、すぐに笑顔を見せた。

「よろしいのですか？私、あなたのその船にとっても興味があります！星を間近に見られる船でしろう？」

「よく知っているね！たくさんの星を見る事ができるよ。」

「とても素敵です！」

私達は、目を合わせながら静かに微笑みあった。

「急な提案に承諾してくれて感謝するよ。ではまた今夜迎えに来る！」

牛と簡単に挨拶を済ませ、私はその場を後にした。土産屋でクッキーというお菓子をかう事も忘れずに、私は山中に停めた宇宙船にそそくさと向かった。

宇宙船に帰り、体に染み付いた牧場の香りを洗浄機で取り除き、客人を招くための準備をした。土産のクッキーを頬張りながら、牛との再会を楽しみに待った。

第二章 牛の友達

山々も静まり返った頃、牧場の上空を旋回した。幸運にも牛舎の前は開けており、私はそこに船を着陸させた。地上に降りて牛舎に近づいていくと、暗がりから白黒の模様が見えてきた。

「どうやら牛は起きて待っていてくれたようだ。」

「やあ牛君！ 迎えに来たよ。」

牛は興奮を含んだ様子で目をキラキラさせていた。

「私とっても楽しimde、今日は早めに寝てお待ちしております！」

「それは嬉しい！ 私もまた君に会える事を楽しみにしていたよ！ みんなを起こさないようそつとここから出よう。」

私は音を立てないようにケージを念力で開錠した。牛舎から抜け出した私達は、こそこそと船まで歩いて行った。目の前にたたずむ宇宙船が近づくにつれ、牛は目を大きく開き呆然とした。

「私は船の操作をするために先に船内に入るよ。その後君を招待するんだけど…体が宙に浮いた事があるかい？」

牛はぽかんとした表情をした。

「鳥のようにですか？ いいえ、私は牛ですよ。」

怪訝な牛の表情がとても愛らしかった。

「ふふ、そうだね。この後君の体は光に包まれて宙に浮くよ。したら船内に入れるんだ。準備は良いかい？」

「ご準備が必要で？」

牛はいよいよかと楽しそうに微笑んでいた。

「はは、心構えの問題さ。ではここで待っていてくれ。」

私は壁をすり抜けるように船内に入った。船の出入りには精神的なコントロールが重要である。慣れない者を招待するには自らが操作をする他ないのだ。

外の様子を伺うと、牛は船のあちこちを珍しそうにまじまじと眺めていた。私は船を浮上させると、牛の上空に移動し入船を開始した。

牛の体は静かにゆっくりと持ち上がった。

牛は少し驚いたように足をバタつかせたが、すぐに身を任せ頭上の光を見つめていた。程なくして船内に、美しい白黒模様が姿を現した。

「やあ牛君、いらっしやい！初めて空を飛んだ気分はどうだい？」

ふうとため息をついて、床に足が着いている事に牛は安堵しているようだった。

「とても不思議でした！ふわふわと体が浮いて。少し不安でしたが、あの不思議な光が私を安心させてくれましたよ！」

相変わらず牛は、楽しみながらもどこか落ち着いた様子だった。

「牛君、君は私の正体を告げた時も、船に招待した時もとても落ち着いていた。私達の事を知っていたのかい？」

牛は優しい笑顔を見せ、その質問を待っていたようだった。

「実はあなた方のことは噂で聞いていたのですよ。仲間内で代々話題になっているんです。まさか自分が体験できるとは思いませんでしたが。」

牛は楽しそうに教えてくれた。

「そうだったのかい?! まさか口伝されているとは嬉しい驚きだよ。」

「はい、時々誰か選ばれて船に乗せられるってね。人間のように私達は記憶を消されて帰されないようなので。」

「はは、その通りさ。彼等は地球を変革する要だからね。極端な思い出は消してしまうのさ。例外もあるがね。」

「私、牛でよかったです!」

牛は元氣よく言い放った。

「ところで牛君。君の足にはたくさんのお土と素敵な肥やしが付いてしまっている。この洗浄機で体を洗おう。」

牛は少しためらい、申し訳なさそうに言った。

「私、水浴びは好きなのですが、乾くまでのジメジメがあまり好きではないのです。」

私は嬉々として彼女を洗浄機に促した。

「心配ないさ。これは水を使わない洗浄機なんだよ。そしてあっという間に完了する。試してごらん。」

牛は少し不安な目を私に向けながら、しぶしぶ洗浄機に入った。

扉を閉め機器を作動させると、すぐさま扉が開いた。

「あれ？扉が開いてしまいましたよ？」

「ふふ、足元を見てごらん。」

牛は自分の足元を見て驚いていた。土や肥やしが無いどころか、白黒の毛並みも美しく整えられている。

「え？！とても綺麗になっています！これは一体？！」

「あつという間だったろう？」

驚く牛を横目に、私は話をしながら船内の一室まで牛を案内した。

「昼間、折り入って話をしたいと伝えていたね。」

牛は船内を見回しながら、私に付いて歩いた。

一室に用意した大きなフカフカのクッションに彼女を促し、私は向かい合わせになるように小さなクッションに腰掛けた。

「私は、地球人の精神を向上させる任務でこの星にやってきたんだ。」

「それは素晴らしい任務ですね。」

牛はとても柔軟に話を聞いていた。

「ありがとう。地球人が対象の任務だが、よければ君の暮らしについても少し聞かせてくれないか。」

「お安いご用です。ですが暮らしについてあまりお話できる事はないかもしれません。」

牛はクッションにゆったりくつろぎながら、優しく私を見つめていた。

「今の生活は幸せという他ないからです。たまに乳搾りの具合が悪いとか、ウサギが脱走して愚痴を話しに来たりとか、そんな事が楽しい思い出となるのです。食肉に加工される牛達の気持ちはまだ分かりませんが

ね。」

牛は空を仰ぐように目を泳がせながら、小さなため息をついた。

「なるほど。君が今幸せでなによりだよ。行く末は誰にも分からないものさ。」

私は慰めにもならない言葉を牛にかけた。それ以上は言葉よりただ黙って頷く方が正しい気がした。

「気苦労をお掛けしました。しかし、自身の終わりを決められる者はいません。そして予測もできません。でも私は悲観しないのです。きっと、誰かの役に立っているはずですから。」

牛は穏やかに言った。

「その通りだね。」

私は彼女をここに招待できてとても幸運に思った。

彼女はとても愛らしく、そして思慮的な牛だった。

「しかし牛君。最近の地球人は悲しみを抱えた人が増えている事を知っているかい？ それこそ、自身の終わりを決める者達がいるのだよ。」

私は至極冷静に伝えた。

「…そうでしたか。私達は食べ物について考えたり、景色を眺めたり。気の合わない仲間もいたりしますが、喧嘩しながらも統制し合います。しかし人間達には…。もっと複雑で色々な事情や考えがあるのでしょね。」

彼女の洞察はとても素晴らしかった。

「今後、地球人が無慈悲な悲観や自虐から脱却できるように、私は手助けしたいのさ。」
私は牛を見つめながら、この任務の責任を再認識していた。

「なるほどですね。それにしても、種族ごとに考えは違いますし、外で暮らしている動物達の事もよく分かりませんが、どうしたらそんな事に？」

牛はどんな状況でそんな事態になるのかと、イメージを膨らませているようだった。

「考えてもよく分かりません。」

「これは複雑な問題の一つだね。」

私は悲しい顔をしてみせた。

「して、どんな方法をお考えで？」

牛は私の顔を見て、次の話題へ移そうとしてくれた。

「いいかい牛君、私は人間の食に目をつけたのさ！今日、君達の牛乳から作られたソフトクリームを食べたよ。とても美味しく、そして幸せを感じた。」

私はゆっくり目を閉じ、ソフトクリームの優しい甘味と幸福感を思い出した。

私の表情を見た牛は、温かく微笑んでいた。

「それは良かった。あれは人間達が作った物ですが、仲間達の牛乳がお役に立てるようとても嬉しいです！」

「君達の牛乳はとても素晴らしいよ。地球人の食生活になくってはならない存在さ。そこで、そんな素晴らしい牛乳にわずかな精神向上を促すような成分を加えてみようと考えたのだが、どうだろう？」

「精神向上成分？それはとても良さそうです。牛乳は人間達に広く普及しているようですし、とても効果的かと。そして『わずか』という所が味噌ですね！」

牛はニヤリとした目をしてみせた。

「はは！その通りだよ。急激な変化は混乱を招く。それがどんなに良い事にみえてもね。」

この時ふいに、数多の経験が私の頭をよぎった。力になれなかったその星は、時として何千年という不和を生み出す事もある。そんな思い出がふと蘇ったのだ。

「弊害ってやつですね！」

突然、牛はどこか得意げに声を張ってみせた。

私は少しびっくりして彼女を見てから、その声のお陰で現実に戻ってくることができていた。

「君は博識だね。」

彼女は本当に賢い。相手の心を軽くする術を知っている牛だった。私はこの一連の会話から、頭の片隅に沈んでいた思い出に、そっと蓋をしてもらえたようだった。

「でも、一体どうやって精神向上成分を足すんです？」

牛は考え込むように尋ねた。

「それはだね、遺伝子改変機器を使い、成分に変化を……。」

「なんだか難しいお話ですね。」

牛は難しい説明ならば不要だと、わざと険しい表情を作ってみせた。

私達は笑い合い、そしてここから任務は始まっていった。

第三章 振動する遺伝子

遺伝子を改変すべく専用機器の発注と、地球の料理ができる装置や材料の発注をした。ほどなくして仲間が荷物の配送を行ってくれるだろう。

それまで私達は、宇宙船で地球の様々な景色を見て回った。

「地球はこんなにも広いんですね。そして宇宙はもっと広い。」

牛は窓から地球と宇宙を交互に眺めた。

「とても広大だね。」

私達は月や一等星も見て回った。牛は時折信じられないといった様子も見せながら、窓の外をとっても楽しそうに見ていた。

私は彼女を見守りながら、搬入の準備をする事にした。

「そうだ！君の牛乳を少しいただいても良いかい？遺伝子改変をした後比較データを出したいんだ。」

「もちろん良いですよ！乳搾りのご経験はありますか？」

「それが初めてなんだ。教えてくれるかい？空を飛ぶように簡単ならば良いのだけれど。」

「それに比べたら眠るように簡単ですよ。」

私は牛から丁寧に指南してもらいながらコップ一杯分の牛乳をいただいた。

ほどなくして訪問の連絡が届き、突如私と同じ背格好をした人物が船内に立っていた。牛はギョツとした

表情で彼を見つめていた。

「やあ※%#!元氣かい?荷物を持ってきたよ!」

はつらつとした青年は私に駆け寄ってハグをした。

「ありがとう△○#◇。」

彼は同じ星出身の同僚である。私との再会を喜んでくれているようだった。牛は私の少し後ろから不思議そうな声色で尋ねた。

「あなたは何というお名前なのですか?とても難しい発音でしたね。」

青年は私の顔を見ながら、茶目っ気のある呆れ顔をしてみせた。

「失念していた。私は※%#!と言うんだ。名乗るのが今更になってしまつてすまない。そしてこの発音は難しいし、君の名前も尋ねていなかったね。」

青年はこのやり取りを見て提案をしてくれた。

「それじゃあさ、僕達の故郷は地球でミラと呼ばれているんだよ!発音もしやすいし、ミラと呼んでもらうのはどうだい?」

青年はそう言いながら、牛にウインクをした。

牛もそれに同調して、

「ミラですか。素敵なお名前です。そしてとても呼びやすい!」

と、牛は私にウインクをしてみせた。

「はは、ミラか。とても気に入ったよ!して牛くん、君は何と呼ぼう?」

「私には人間が付けてくれた名前があるのですが、良ければあなた方が呼びやすい名前を付けてくれません

か？」

青年は宙に目線を送ったが、すぐに何か思い立ったようだった。

「君は白くてフワフワでとても愛らしい。地球で同じように愛らしい綿という植物があるんだ！そこから取ってワタと言うのはどうだろう？」

牛は目をキラキラさせて、うんうんと頷いた。

「気に入ってくれたかい？では君はワタだ！改めてよろしく！ワタ！」
そして私達は、このあまりにも遅すぎる自己紹介に思わず笑い合った。

青年は無邪気な笑顔を私達に向けながら、注文した品をあっという間に船内に搬入した。

「これで揃っているはずだよ！」

私は品物を確認し、操作データも受け取った。

「ありがとう、とても助かったよ。」

「お安いご用さ！僕も以前地球に来たことがあるから、またここまで来れて嬉しいんだ！」

彼は私より長く生きている。そして任務のベテランであり、とても自由人だ。こうやって配達業を担っている事もあるし、しばらく故郷で楽しく過ごす事も多い。様々な事を朗らかにこなす、とても尊敬している仲間の一人だ。

「あなたも地球にいらした事があったのですね。」

ワタもそんな彼の人柄を察してか、すぐに打ち解けたようだった。

「そうなんだよワタ！僕もミラと同じように、地球の任務をした事があるんだ。その時は植物について調査

をしてねえ。」

彼は目を閉じて、思い出に笑顔を浮かべていた。

「して、あなたは何かとお呼びすれば？あなたのお名前もとても難しい発音でした。」

ワタは先程聞いた私達の名前を発音しようと、口をもごもごさせていた。

「はは！気にしないでいいさ！次の配送が待っているから、すぐに行かなければならない！ではお二人さん、楽しい任務を！」

青年は、私とワタにハグをしてから颯爽と去っていった。

「なんだか風のような方でしたね。」

「彼はいつもそうなんだ。とても気の良い奴さ。そうだ。彼のことはカゼと名付けたら良いかもね。」
私はワタにウインクしてみた。

「それは名案です！」

ワタは楽しそうに目をキラキラさせて、窓からカゼの船を見送っていた。

私は早速、ワタに遺伝子改変機器を装着した。

「すぐに済むよ。痛くも痒くもないから安心してくれ。」

「いやはや、不思議な機器ですね。しかし遺伝子改変とは…。」

分からない事が分からないといった表情で、ワタはされるがままに立っていた。

「そうだねえ。地球人や動物達、植物なども太古から遺伝子を…、やっぱりこの話はやめておこう。宇宙史

の講義はとてつもなく長い。」

「左様ですか。いずれ聞かせてくださいね。」

本当に興味があるのかないのか、ワタは樂觀的な口調で言った。

「ぜひとも。いずれ必ず。では装置を起動させるよ。準備は良いかい？」

「ご準備が必要で？」

ワタは目をパチパチしてみせた。

「はは。心構えの問題さ。では！」

装置は音もなく作動し細かく振動した。次第にワタの体に接触している部分が強く光り、すぐさま緩やかに消えていった。

「これで完了だよ。」

「本当に痛くも痒くありませんでした。そして変化が全く分かりません！」

「そういうものさ。でも、これで君の牛乳に精神向上成分を少しだけ加える事ができたよ。では、さつき君からいただいた牛乳と成分を比較してみようか。」

私は二つの牛乳を検査キットに付着させ、データを算出した。そしてワタにも文字が分かるよう、テレパシーに似た伝達方法で文字情報を伝授した。

「これが元の牛乳の数値だよ。そしてこっちが新しい牛乳の数値。脂質やタンパク質のほかに『精神向上質』というものが加わっているだろう？」

ワタはまじまじとデータを見比べた。

「精神向上質0.0001mgとなっていますが、多いんだか少ないんだか正直分かりませんね。」

「確かに。しかし、この機器はとても優秀さ。地球人の体に適切な『わずか』な成分量になっているよ。」
ワタはとても納得したようだった。

「わずかが味噌ですもんね！」

と、唯一理解できるわずかなものに、得意気な顔をしてみせた。

第四章 宇宙クッキー

私達は早速調理を試みる事にした。

「この牛乳を使って作ってみたいものがあるんだ。」

私は土産屋で買ったクッキーをワタに見せた。私はソフトクリーム同様、すでにクッキーにも魅入られていた。

「これは地球で定番の土産、クッキーというものさ！」

「美味しそうな香りがする食べ物ですね！出来上がったら味見させてもらえますか？」

「もちろん！本当ならこの糖分量はオススメできないけれど…、害物質洗浄機が体を洗浄してくれる。ここにいる間は特別だよ。」

「それは良かった！私あの洗浄機が大好きです！」

ホログラムに地球のレシピを映し出しながら、ワタはレシピを読み上げる役目を。私はクッキーを作る役目を担った。不恰好な丸い形になってしまったが、見た目より味や成分が大切なのである！

「さあできたよ。」

私達は目を合わせながら、恐る恐るクッキーを口に運んだ。

「これがクッキー！どこか懐かしさと優しい甘みが！サクサクでとても美味しい！」

ワタは目をパチパチさせながら高揚した表情で味わった。

「本当に美味しいね！大成功だ！」

私達はサクサクの幸福感を目いっぱい味わった。

「おや？精神向上成分が効いているのか…なんだか穏やかな気持ちに…！」
ワタは大袈裟に深いため息をつきながら、にっこり笑った。

「はは！それは効果絶大だね！実際のところ、精神向上に関してはほとんど実感がないはずさ。これはきつかけの一つにすぎない。例えば特別な力を身に付けても、自らで何かに気付かなければ何にもならないからね。そこから本来の自分を取り戻すきっかけが生まれるんだ。このクッキーのように、これからこの牛乳が使われる土産品達はそれをそつと後押ししてくれるはずだよ。」

「それは素敵の後押しになりますね。私達が作ったこのクッキー、可愛く『宇宙クッキー』と言うのはどうですか？」

ワタは窓の外を見ながらクッキーを頬張った。

「それは名案だ！」

私達は宇宙クッキーを頬張りながら、この先の任務について会議を行なった。たくさんの牛達を遺伝子改変するには、大型の装置が必要である。私は再度機器の発注をした。

そして再び、忽然とカゼが船内に現れていた。

「やあ！さっきぶりだね！」

カゼはにこやかに言い放った。

「何度もすまないね。」

カゼは私達にハグをしながら、

「お安いご用さ！」

と、嬉しそうに挨拶をした。

「さっきぶりです！カゼさん！」

「カゼ？僕の名前かい？はは！気に入ったよ！」

カゼはカバンから装置と虹色の石を取り出した。

「君がこの装置を使うのは初めてだろう？僕も協力しようか？」

「いいのかい？そうしてくれると嬉しいよ！」

カゼはニコツと笑うと、装置に石をセットした。

「この石はなんですか？」

ワタは不思議そうに装置を眺めた。

「これはエネルギーさ。ワタ、この石を間近で見teごらん。」

カゼはワタに石を近づけた。

「石の中にキラキラしたレンゲ畑があるみたいですよ！とっても綺麗！」

「素敵な例えだね！これは故郷で採取できる特別な石さ。これを装置にセットして、振動と光量を増幅させる事によって…。」

難しそうな話題になると察し、ワタは険しい表情をしてみせた。

「はは！説明は次の機会だね！とにかくこの石を使えば、一度に多くの遺伝子改変ができるわけさ！」

私とカゼは数値を思案し、宇宙船外部に装置を取り付けた。

各酪農場へ行き、こっそり装置を可動させていった。何事もなかったように、牛達は皆穏やかに眠りについている。

あつという間に酪農場を巡り、遺伝子改変を風のように完了させた。

「ありがとうワタ。ありがとうカゼ！君達のおかげで完了だ！」

二人はニヒヒと笑みを浮かべていた。

「それで、この任務は土産品の完成まで見届けるだろう？このまま僕も見届けて良いかい？ここまで来たら先が気になって！」

カゼは手を合わせて目をキラキラさせていた。

「ふふ、ぜひ頼むよ！君がいてくれたらとても心強い！」

「よろしくお願いしますカゼさん！」

「こちらこそよろしく！ミラ！ワタ！」

こうして私達三人は、牛乳の出荷から菓子製造、土産屋に商品が並ぶまでを見守った。そして、いち早く到着していた牧場のソフトクリームを観察する事にした。

その日、牧場に来ていた母親とその子供を観察対象に選んだ。

「ママー！牛さん！」

「うん。あんまり大きい声出さないで。」

念思すると、この親子は二人で慎ましく生活しているようだった。

「ママー！ソフトクリーム！」

「カップ？コーン？」

「コーンー！」

「…。」

私達は二人の様子を船から見守った。

「おいしー！」

「上手に食べて。アンタはいつも…。ねえ着替え持つて来てないからね。」

母親は電話機器を片手に、子供をチラチラ見ながら無表情で接している。

子供は気にしないといった明るい振る舞いを見せつつも、内心は少し寂しげで、こわばるような心の色に染まっていた。

「子供は大人が思う以上にたくさんの事が分かるものだよね。そして色んなものを守るために振る舞う事も知っている。」

私は子供の姿を見ながら、幾千年もの淡い記憶を思い出していた。

そんな私を見て、カゼはそっと肩を抱き寄せた。そしてワタも私の肩にそっと頬を寄せた。

アイススクリームを食べ終わって、ベンチで少し休憩を取っていた二人。突然母親は思い立ったように言った。

「ねえ、今日オムライスどう？最近作ってないでしょオムライス。」

「オムライス！」

「卵にこの牛乳入れたらもっと美味しいかもね。」

「いつも美味しーよー。」

「…うん。」

母親は、ご機嫌な様子でベンチに座っている我が子が、不思議と何か少し寂しげに見えた。その違和感が何か掴もうとする間もなく、子供は母親の顔を見て元氣よく声を上げた。

「ママー！お土産クッキー！」

いつものようにニコニコしている。

「はあ。クッキーね。あと牛乳も。」

「わーい！」

「しーっ！もう…」

どうしてこの子は。

でも、何か……。

カゼは二人の様子を微笑みながら眺めていた。

「その調子だよね母さん。」

カゼは優しく船内から応援していた。

ワタも母親の変化に気が付いたように、

「ママの様子が……。しかしお嬢ちゃん、とても愛らしいですね。」

私達はその母親の様子から、この任務の成果を実感していた。

その後も順調に牛乳、土産品が生産されていた。

「これで無事に人々に渡っていくね。」

私は至極ほっとしていた。

「はい。人間達が少しでも安らぎを感じる事が出来ると嬉しいですね。」

ワタは、そんな私の様子を見て温かく微笑んでいた。

「それは大丈夫さ！この宇宙クッキーはとても美味しい！」

カゼは陽気に手作りのお菓子を頬張っていた。私達三人は宇宙クッキーを始め、牛乳を使ったお菓子を手作りして、宇宙船で祝賀会を開いていた。

「ミラとカゼはこれからどこに行くのですか？」

「私達は故郷へ帰ってこの成果を報告するよ。」

横ではカゼが、お菓子を頬張りながら頷いていた。

そんな私達の様子を見ながら、ワタは笑顔をみせながらも少し寂しそうだった。

「この任務は、私の素敵な思い出のひとつになりました。ありがとうございます。カゼ。」

私は幾度か考えた提案をワタにしてみる事にした。

「ねえ、ワタ。君も私達の故郷にこないかい？とても素晴らしい所だよ。」

ワタはニコッと笑い、首を横に振った。

「それはとても素敵です。けれど私は牧場に戻ります。会いに来てくれる人間達がこれからどう変化していくのか、あの親子を見ていたら今後がとても気になってしまっ！」

カゼは笑顔でワタを見つめた。

「そうか！私達の任務もまだまだ続くけれど、君にも新しい任務が出来たわけだ！頼りにしているよ！ワタ！」

「ふふ。はい！きっとまた会いに来てください。その時はぜひ、地球人の様子をご報告させてください！」頼もしいワタを見て、私の心は温かくなった。

「それは楽しみだ。必ずまた会いに来るよ。」

ワタを牧場に帰し、私達は抱きしめあった。

「君は特別な牛だよ、ワタ。」

「あなた達こそ。私、二人が大好きです。」

「私達も大好きだよ。いつでも愛を送っているからね。」

短い言葉を交わし、私達はそれぞれの任務へ移っていった。

帰りの船内で私達は、この素晴らしい任務について思い返していた。

「やっぱり地球はとても豊かな星だね！来るたびに素敵な思い出が増えていくよ。」

「ワタに会えた事が何よりの幸福だよ。任務は大功さ。君にも感謝しているよカゼ。」
「それはなにより！こちらこそありがとうミラ！」

私達是不恰好な宇宙クッキーを頬張りながら、

少し立ち止まり船内から地球を眺めた。

地球の者達が健やかな時を過ごせるよう、祈りを込めて。

第五章 この手記について

私がこの手記を娘から受け取ったのは、いつものように二人で牧場へ遊びに行ったある日の事でした。娘のお気に入りである白黒模様がキレイな牛さんに会いに、その日も牛舎まで足を運んでいました。

以前の私は、牛舎までの短い距離を歩くのでさえ何だか億劫で、娘の言動や行動に、いちいち目を光らせていました。しかしある日を境に、私は私の子供の頃の思い出や気持ちがあふと頭に浮かぶようになりました。そして、自分が思い描いていた大人に今なれているのか、子供の頃嫌いだった大人に自分になってしまっていないかなど、とても考えるようになりました。そして一番の変化は、娘に対する自分の態度でした。その日、白黒の牛がゆっくりと私に額を近づけるような動作を見せました。私は、

「触っても良いのかな？」

と牛に尋ねながら、そっと額を撫でていました。

すると、急に牛が後ずさっていききました。どうしたんだろう？と牛を見ると、私の後ろの風景を凝視しているように感じたので振り返りました。いつもの原っぱと山々が広がっていて、その日は少し雲の多い日でした。

同時に私は真後ろにいた娘に気が付いたのですが、娘は手に見慣れない青いノートを持っていました。

「これママにあげてって！」

「そうなの？今誰かいた？これをママに？」

私は、娘と自分以外の気配に全く気が付かなかったので、少し驚いたのですが、娘から青いノートを受け取ってペラペラとめくってみました。

「目が海みたいだったー！ニコってしたよ！」

と言う娘を横目に、何やら手記のような、この不思議なノートに目を通しました。

宇宙人？と牛の話。そして、その中に出てくる親子。何だか私は、この親子が自分達の事に思えて仕方ありませんでした。そして、このノートの内容がもし真実であるならば、私は変化を体験した人間の一人なのかなど。その時、妙に納得した気持ちになったことを覚えています。私の体験や、娘が出会った、目が海みたいな人”

不思議で夢みたいな話なのですが、この青いノートを見るたびに、本当にあったことなのだろうと、手に取りながらも不思議な気持ちで、たまにこの手記を読み返しています。私はあの日から娘の事や仕事の事、実家家族の事、なんとなく色んなことがうまく行っているように感じています。

それは、あの日をきっかけに、今まで自分が見ていた視点と違ったものの見方が出来るようになったおかげだと思っています。

もしいつかを境に、私のように変化を感じていた人がいたならば、『それは真実だよ』と伝えたくて、この手記を物語として書いてみることにしました。

これが誰かのきっかけになりますように。

それが確信になりますように。

心から願いを込めて。

完

うちゅう

宇宙クッキー

2025 年 10 月 25 日 発行

著者 アスカ

令和 7 年度 函南町立図書館 8 月～11 月 Y A 展示・企画冊子

編集・製本・発行 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

住所 419-0122 静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

地球へ任務に訪れた宇宙人が函南町で一頭の牛と出会う。彼らは地球人の精神向上を目指し、遺伝子改変した牛乳で宇宙クッキーを作り出す。宇宙人と牛のそつと心に寄り添いながら小さな日常に希望を灯す、愛らしい物語。

